

大学の教育力と学士力形成に関する一研究 —学士力アンケートによる大学教育力の検証の試み—

土橋信男

【要旨】

中央教育審議会は2008年末の答申『学士課程教育の構築に向けて』で大学教育の結果として学士力が形成されることが望ましいと提言した。では学士力は何によって形成されるのであろうか。本論文は、学士力は広く大学が有している教育環境によっているということを前提として、その教育環境を構成しているものとして、大学教員、職員、学生、行事等の総合的環境、非人的環境がそれぞれ学生の人間形成に与えている大きさの度合いについて、学生を対象にして調査し、そのことから大学教育力のありかたを論じたものである。調査対象とした大学は、小樽商科大学、函館大学、桜美林大学、北星学園大学である。調査の結果として、人間形成への影響は、大学教員によるものが最大ではあるが、それに匹敵する大きさを学生仲間が持っていることが明らかになった。本論文は、大学の教育力についての検証の試みとして、学生に対するアンケート調査を実施した結果を基に、この種の調査をより広く行うべきこととして問題提起をしたものである。

キーワード：大学の教育力、教育力の測定、学士力形成、大学の教育的環境、
学生研究

はじめに

大学の教育力とは何であろうか。それは大学が学生に対して総合的に働きかけている教育に関わる働きだといえるのではないだろうか。大学の教育力の最重要の担い手は大学教員であろうが、学生への教育的働きかけは、教員だけではなく、教育支援をしている職員の働きや、学生の学習のための施設設備、そして大学全体が醸し出しているアカデミックな環境・雰囲気などによっても行われているのではないか。また、何よりも、同じ学ぶものとしての学生の仲間からの影響も教育的な働きだとはいえないだろうか。

では、それらは実際にどのように働いているのであろうか。そして、それがどのように教育の成果として顕れているのであろうか。それを測ることはできるのであろうか。

本研究の目的は、こうした疑問から発したものである。すなわち、大学の教育力が実際に学生にどのように働き、あるいは学生に認知されているかについて、学生を対象として質問紙法

により測ろうとしたものである。

1. 大学の教育力と学士力：問題の所在

大学の教育は何によって行われているのであろうか。

それは、制度的・形式的には、大学設置基準に従い、教育者としての教員を備え、卒業（学位授与）に必要な教育課程（カリキュラム）を設置して、学生に卒業に必要な単位を修得させることによって行われている。

そして、そうした大学全体での教育の仕組みが大学の教育力として考えられている。したがって、それぞれの大学は、建学の理念やその大学の社会的使命を基に、その大学としての教育目標を表し、それに向けて大学全体として教育を行っているのである。そして、その教育の結果については、学位授与・卒業という形式で表しており、卒業したということがその大学での教育の結果だとしている。それが社会的に通用する力量をどれだけ持っているかということについては社会において働く中で表されており、その意味では卒業したということの中にまとめて教育の成果をみているといっていよい。

その意味で、中央教育審議会が2008年末に発表した大学教育に関する答申「学士課程教育の構築に向けて」の中で、あらためて学士力ということを取り上げ、その内容について提起したのは、大学教育の結果としての力量を示すものとして極めて注目に値するものであり、重要な問題提起であったといえよう。なぜならば、以下に示すように、学士力とは大学で受けた教育の結果として大学を卒業するまでに大学で培った力として表されているからである。

中央教育審議会の提言である学士力は4分野（知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、総合的な学習経験と創造的思考力）とそれらに関わる13項目（異文化・多文化の理解、人類の文化・社会と自然に関する理解、コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力、自己管理力、チームワーク・リーダーシップ、倫理感、市民としての社会的責任、生涯学習力、知識の総合的活用と課題解決能力）である。

重要なことは、これまで大学教育の主要な内容として言われてきた知識・技能だけではなく、それらを用いて現代社会で必要とされている人間関係における働き力、また感性や価値観等をも含んでいることである。

これは、2008年から経済産業省が提起してきた社会人基礎力（主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）とも共通する内容を持っている。社会人基礎力は、現代社会を構成する社会人として必要な基礎力を意味していて、必ずしも大学を卒業としたことを前提とはしていないが、しかし、その開発に際して大学に協力を依頼していることから、狙いとしていることは共通しているものといえよう。（そうであれば、文部科学省の学士力と、経済産業省の社会人基礎力とを統合することが望ましいのであるが……）

さて、人間の才能・技能や知識・技術を測定することは、知能検査や技能検定などのように、

これまで試験（テスト）という形で行われてきている。しかし、それは人間の持っている能力の極く一部であり、断片であり、それをもって人間を測っているのではない。

学士力で表された様々な力も、それらを実際に測ろうとすると非常に難しいといえよう。特に、論理的思考力、問題解決力、あるいは自己管理能力など、どれをとっても実際にそれを測定することは至難だといえる。

では、大学教育の結果をどうして知ることができるのだろうか。学士力という個々に分けられた力でも難しいのに、大学教育の結果という全体の教育による成果を客観的に測ることなど不可能ではないか。

そこで、筆者の試みたのは、教育の受け手である学生に、客観的にはなく、主観的に自分は誰によって、あるいは何によって大学時代に影響を受け、そして自分が人格的・人間的に成長したのか、ということ質問することにより、何が学生に教育的な影響を与えているのか、探ろうとした。

次項にその質問紙の質問項目についての説明を行うが、それは非常に簡単な質問であり、それによって教育の成果を厳密な形で明らかにするものではないが、少なくとも問題の所在を示唆するものだといえるのではなかろうか。

2 学士力形成アンケートのデザイン：大学の教育力を測定する

ここでは、大学における教育の成果が学士力という形で表されるということを前提にして、学士力という言葉で大学教育の成果を表すことにして、質問紙の名称を学士力形成アンケートとすることにした。

さて、では学士力は何により形成されるのであろうか。それは、大学の教育力によって形成されるのではないか。では、大学の教育力は何によって構成されているのか。

大学の教育力を構成しているものは何か。それは大きく分けて、先ず人的環境であり、さらに非人的環境である。

人的環境としては、第一に教員、職員、学生仲間、そして大学全体のプログラムとして人的な要素によって構成される行事をあげてみた。

第一の人的環境である教員については、先ず基本としての授業。授業には、大人数の大教室での授業もあれば、少人数のゼミもある。また、実験・実習の指導もある。それらが大学における教育力の中心であろう。

次に学生は教員により授業だけから学ぶのではない。教室以外の場面で個人的な指導や助言によっても学ぶのである。オフィスアワーでの面談もこうした指導助言である。

第二に職員の存在がある。近年、大学の職員の重要さが指摘されているが、それは、職員の大学行政や事務に関わる職務だけではなく、学生に直接・間接に関わる内容が増え、職員の職務が多岐化してきたからである。それらには、図書館などの施設設備の利用や、カウンセリング、キャリアガイダンスや企業訪問などのガイダンス等がある。

第三に学生が最も深く関わるのは学生仲間（先輩、同輩、後輩）である。それは、クラスの仲間、ゼミの仲間、部活動の仲間、アルバイトの仲間、そして同じ寮や下宿の仲間など、多くの学生仲間と交わり、そこからも影響を受けているのである。

第四に大学における様々な行事がある。入学後のオリエンテーション、大学祭、特別講演、特別セミナーなど、さまざまな行事に関わる中で、学生は自分を成長させているのである。

以上の他に、大学の非人的環境も人格形成に意味を持つと考えられる。その第一に図書館があり、また自習や共同学習のための学習室などの施設設備がある。さらに、情報処理室、実験室、実習室、屋外の施設など、さまざまな学習や研究のための施設がある。また、大学が一定の敷地を持ち、庭や建物群を教育に適するものとしていわゆるアカデミックなキャンパスを構築するのは、そうした大学独自の雰囲気让学生在に影響を与えるからである。

以上の前提から、以下のような質問紙を作成した。

大学の教育成果としての学士力形成に関するアンケート

以下の項目で該当するものに○を付けてください。または空欄に該当する数値を記入してください

性別 女 男

学科 学年

近年、大学における学士課程における教育が十分であるかどうかと言うことが問題にされています。このことをめぐって、中央教育審議会での報告では、学士力と言う言葉でその成果を問うています。

学生は、大学においては、授業という正課教育を通じて学ぶことが基本ですが、それ以外にも、課外教育としての部活動やサークル活動、ボランティア、友人との交わり、あるいは職員との接触など、さまざまな人たちから影響をうけています。また、大学時代の講演、読書やその他の知的・技能的活動、あるいは大学のキャンパスの持つ雰囲気といった知的環境からも影響を受けていると思われます。

あなたは、大学における学生の成長・発達（知的のみならず人格的・人間的にも）がどのような要因でなされていると思いますか？ すなわち、何によって影響を受けて成長・発達が行われたと思いますか？ あなた自身についてと、あなたが観察している大学の学生についてと、その両方にお答えください。

以下の空欄にあなたの考える影響力の割合を数字で合計が100%になるように記入して下さい。

あなた自身について

T1：教員によるもの（授業・ゼミ・実習など）	_____	%
T2：教員によるもの（個人的な指導）	_____	%
S：職員によるもの（直接・間接に）	_____	%
P：仲間によるもの（部活、サークルその他）	_____	%
E：総合的環境によるもの（大学全体から）	_____	%
N：非人的環境によるもの（キャンパスの雰囲気）	_____	%

今、学んでいる大学生一般について

T1：教員によるもの（授業・ゼミ・実習など）	_____	%
T2：教員によるもの（個人的な指導）	_____	%
S：職員によるもの（直接・間接に）	_____	%
P：仲間によるもの（部活、サークルその他）	_____	%
E：総合的環境によるもの（大学全体から）	_____	%
N：非人的環境によるもの（キャンパスの雰囲気）	_____	%

さて、以上のアンケートの実施をしたときにどのような結果が得られるであろうか。

その回答への筆者の期待値は以下のようなものであった。

教育力：学生に対して影響を与えている比率

T1：授業などの正課の教育によるもの	40%
T2：教員の助言・相談・指導など個人指導	10%
S：職員の支援によるもの	10%
P：仲間によるもの	30%
E：総合的環境によるもの	5%
N：非人的環境によるもの	5%

この数値は、これくらいは影響を与えてほしいという、筆者の期待値である。

教員の教育力の高いところはこれよりも高い値を示すだろう。いずれにせよ、この期待値は、大学の教育力の約50%は教員によって担われていて欲しいという願いでもあった。

その結果は次の項で明確になる。

3 4 大学および1大学院における調査の結果

学士力形成アンケートの調査は2009年の1月から始めて、2010年の8月まで4大学と1大学院の学生を対象に行った。その概要は以下の通りである。桜美林大学大学院を除き、調査実施の時期の順序で記載した。

小樽商科大学（国）	3・4年生	218人	（2009年 5、6月）
函館大学（私）	1～4年生	105人	（2009年 7月、2010年 1月）
桜美林大学（私）	3・4年生	155人	（2010年 4月）
北星学園大学（私）	2・3年生	50人	（2010年 7月）
桜美林大学大学院（私）	大学院生	60人	（2009年 1、8月 2010年1月、8月）

それぞれの調査の実施状況と対象（サンプル）についての説明は以下の通りである。

小樽商科大学 3・4年生のゼミ担当教員に依頼をして実施した。

調査の実施は2009年の5月と6月に行われた。

函館大学 1年生（46人）については、教職課程履修者で筆者の授業を履修した学生であり、2009年の7月に実施した。2・3年生（20人）については同じく教職課程履修者で筆者の授業を履修した学生であり、2010年の1月に実施した。3・4年生39人についてはゼミ担当教員に実施依頼をして調査をしたもので、2009年の7月に実施した。

桜美林大学 3・4年生の学科主任担当者に依頼をして2010年の4月に実施した。

北星学園大学 2・3年生の教職課程履修者を対象に7月に実施した。

桜美林大学大学院 大学院修士課程1年生 筆者の大学アドミニストレーションの授業履修者を対象に4回にわたって実施した。

以上のような対象と実施時期であるが、以下の結果に見られるように、比較的共通する数値となった。なお、この数値は、いずれも自分自身に関する回答数値である。

アンケートには、同じ世代の他の大学生一般はどうであろうか、という設問も行ったが、殆どその数値は変わらなかったもので、ここでは掲載しない。

以下が調査の結果得られた数値である。

第1表 小樽商科大学の学生の回答（調査、2009年5～6月） 3・4年生（218人）

教員（授業、ゼミ、実習、集团的訓練等）	23.6%
同（個人的な指導、助言、相談）	8.8
職員（直接、間接的な教育支援）	5.5
仲間（先輩、同輩、後輩など）	46.8
総合的環境（大学全体の行事など）	7.9
非人的環境（施設設備、キャンパスの雰囲気）	7.4

第2表 函館大学の学生の回答 (調査、2009年7月、2010年1月) 1～4年 (105人)

教員 (授業、ゼミ、実習、集団的訓練等)	23.6%
同 (個人的な指導、助言、相談)	15.4
職員 (直接、間接的な教育支援)	11.0
仲間 (先輩、同輩、後輩など)	30.6
総合的環境 (大学全体の行事など)	9.2
非人的環境 (施設設備、キャンパスの雰囲気)	10.2

第3表 桜美林大学の学生の回答 (調査、2010年4月) 3・4年生 (155人)

教員 (授業、ゼミ、実習、集団的訓練等)	25.0%
同 (個人的な指導、助言、相談)	17.3
職員 (直接、間接的な教育支援)	9.5
仲間 (先輩、同輩、後輩など)	30.4
総合的環境 (大学全体の行事など)	8.5
非人的環境 (施設設備、キャンパスの雰囲気)	9.3

第4表 北星学園大学の学生の回答 (調査、2010年7月) 2・3年生 (50人)

教員 (授業、ゼミ、実習、集団的訓練等)	29.1%
同 (個人的な指導、助言、相談)	13.2
職員 (直接、間接的な教育支援)	7.9
仲間 (先輩、同輩、後輩など)	30.3
総合的環境 (大学全体の行事など)	9.2
非人的環境 (施設設備、キャンパスの雰囲気)	10.3

第5表 桜美林大学大学院の院生の回答 (調査、2009年1月、8月、2010年1月、8月)

修士課程大学院生 (60人)

教員 (授業、ゼミ、実習、集団的訓練等)	21.3%
同 (個人的な指導、助言、相談)	13.3
職員 (直接、間接的な教育支援)	5.1
仲間 (先輩、同輩、後輩など)	38.6
総合的環境 (大学全体の行事など)	11.2
非人的環境 (施設設備、キャンパスの雰囲気)	10.5

4 学士力形成アンケートによる調査結果が示すこと

この調査の結果は何を示しているといえるだろうか。先ず数字の示すところを読みとってみたい。

ただし、ここでは大学院生の調査結果は比較の対象にはしないでおく。すなわち四つの大学の大学生を対象とした結果について検討する。それは、大学院生は平均年齢が推定40才ほどであり、全員が職業人で、調査実施時の指示は、それぞれが大学生だった時のことを思い出して記入してほしいというものであり、他の現役の学生とは状況が異なっているところからである。ただし、その内容については、現役の大学生とそれほど異なるものではないので、最後に取り上げることにする。

先ず学生が自己の成長・発達に最も大きい影響を与えた大学における要因は仲間によるものだというのである。

四つの大学すべてにおいてそうである。特に小樽商科大学では46.8%と教員の授業と個人的指導を合わせた32.4%よりもはるかに大きい。

他の三つの私立大学では、仲間による影響力は殆ど同じ割合である。まず函館大学が30.6%、桜美林大学が30.4%、そして北星学園大学が30.3%である。この国立大学と私立大学の違いは何を意味するであろうか。興味ある差である。

次に大きい影響を与えているのは、教員による授業を通じての教育である。北星学園大学29.1%、桜美林大学25.0%、そして函館大学23.6%、小樽商科大学23.6%とこの二つは同じ大きさを示している。北星学園大学が他の三大学に比較してやや大きな値を示しているが、それほど大きな差ではない。

第3に大きい影響を与えているものは教員による個人的な指導・助言である。ただ、これについては、大学による違いが大きい。桜美林大学が17.3%と最も大きく、次に函館大学が15.4%、北星学園大学が13.2%。そして、小樽商科大学は8.8%で最も小さい。すなわち、教員による学生への個人的な関わりは大学間によりかなりの差があることがわかる。

この数値からは、桜美林大学の教員が最も学生との授業外での指導・助言、そして接触が多いということが分かる。小樽商科大学は唯一の国立大学だが、教員の個人的指導・助言などが他の三つの私立大学に比較して小さいのは国立大学に共通するものだろうか。

以上の教員に関する影響力の大きさは各大学に共通するものであったが、次に大学職員についてはどうであろうか。これについても大学間によりかなりの違いがある。

まず一番大きな値を示したのは、函館大学であり、その数値は11.0%、次が桜美林大学で9.5%、そして北星学園大学で7.9%。最も小さいのが小樽商科大学で5.5%であった。

大学における職員力が今注目されてきている。特に、教育支援にも職員が役割を持っていることが注目され重視されるべきだと言われているが、約10%の値を示した函館大学と桜美林大学の場合には職員の教育支援力がかなり大きく働いていると言えるのではないだろうか。

さて、大学の総合的環境としての行事などと、非人的環境の施設設備あるいはキャンパスについてはどうであろうか。これら二つの示す値はほぼ同じであるが、非人的環境としての施設設備やキャンパスの方がやや高い数値を示している。

北星学園大学 10.3%、函館大学 10.2%、桜美林大学 9.3%、そして小樽商科大学7.4%である。私立大学の方が、国立大学よりも学生の教育施設・設備やキャンパス整備に力を入れているということの結果が表れているのだといえないだろうか。

大学の行事などについては、函館大学と北星学園大学が同じで9.2%。桜美林大学8.5%、そして小樽商科大学7.9%である。大学の行事などは、私立の場合には建学の理念と関わりを持つ場合が多いので、ここにも国立との差があるのではないかと思われる。

最後に大学院生の回答を見る時に、他の4つとの違いは、一つは教員の授業からの影響が比較的小さいことである。それとの対比において、大学の行事などやキャンパスからの影響が大きいことである。大学を卒業してからかなりの年月を経ると、むしろ大学全体のイメージが強くなるのだろうか。殆ど全員が異なる大学で学んでいるので、その中でこうした結果がでるというのは興味深いことである。

さて、以上の結果を最初に提示した、望ましいあり方としての期待値と比較してみた場合、どのようなことが言えるであろうか。

筆者の期待値では教員の授業 40%、個人的指導 10%、職員の支援 10%、仲間の影響力 30%、総合的環境 5%、非人的環境 5% としてみたのだが、教員の授業に関しては、期待よりも結果が低かった。そして、他の要因においては期待値より大きな数値となっていた。

筆者の期待値は大学教員は教育を主たる業務としているのであるから、少なくとも約50%の影響力を持ってほしいという期待であり、願望であった。

このことについて何人かの大学教員に訊いてみた。その答えは次のようなものであった。

「40%も影響しているとはすごい。自分達はせいぜい10%か多くても20%くらいだと思っていた」

というのである。ここに今日の大学教育の問題があるのではないかと思われるが、このことについては後述したい。

なお、アンケートに回答してもらっているのは、性別、学年別、学科別のみであるが、それらとのクロス集計によっても大きな有意差はなかった。後にも述べることであるが、これはあくまでも問題提起的に行った調査であるので厳密な統計的处理はあまり意味がないと考えて行なわなかった。

5 我が国の大学教育に関する今後の課題:学生研究による大学の教育力の検証

筆者が米国留学中に学んだのは、大学に関するマネジメント (Higher education administration) であった。米国の大学は、大胆に分けると米国的な大学として発達したりベラルアーツカレッジ、コミュニティカレッジ、そして大学院大学 (高度研究職、および高度専門

職教育)である。

それらは、よりよいあり方を自由競争の中で追求してきたといえる。そのよりよいあり方を追求する仕方の一つが実証的な調査研究を基礎とする大学の個性追求なのである。米国では多くの大学で、自分の大学の教育がどう学生に影響を与えているかについて調査・研究が行われてきている。その調査・研究の成果をまとめた労作が以下に紹介する4冊の文献である。

(i) フェルドマン・ニューカムの『大学の学生に与える影響』(1969年)

Kenneth A. Feldman and Theodore M. Newcomb *The Impact of College on Students* 1969, Jossey-Bass (Volume 1 474pp. Volume 2 171pp)

この研究は、米国における学生を対象にして行われたそれまでの調査・研究の集大成で、大学生の在学中の以下のような項目に関しての変化についての研究を集めたものである。

1 価値観の変化に関すること、2 学生の職業観の変化に関すること、3 宗教観の変化に関すること、4 知的な関心の変化に関すること、5 態度の変容に関すること、6 達成感に関すること、7 自己表現に関する変容に関すること、8 男性的、女性的な行動変容に関すること、9 社交性に関する変容に関すること、10 職業選択と専攻の関係に関すること、その他、24項目についての研究成果が網羅されていた。Volume 1 (第1巻)が本文で、Volume 2は資料編である。

(ii) パスカレラ・テレンジニの『大学は如何に学生に影響を与えてきたか』(1991年)

Ernest T. Pascarella and Patrick T. Terenzini *How College Affects Students*, 1991, Jossey-Bass, 894pp.

フェルドマン・ニューカムの労作の続編ともいえるものが、このパスカレラ・テレンジニの著作である。その副題に「20年間に行われた研究の結果とそれによる洞察」とあるように、フェルドマン・ニューカムの行った労作を跡付けるもので、ほぼ忠実にフェルドマン・ニューカムが行った価値観の変化からはじまる調査・研究の分類に従っている。なお、フェルドマン・ニューカムの労作も、このパスカレラ・テレンジニの労作も、いずれもペーパーバックとして出版が続けられており、現在でも書店に並んでいるのである。

(iii) パスカレラ・テレンジニ『大学は如何に学生に影響を与えてきたか』(2005年)

Ernest T. Pascarella and Patrick T. Terenzini *How College Affects Students Volume 2*, 2005, Jossey-Bass

1991年の同じ書名の研究成果である。ただし、ここには1991年以後の15年間の学生に関する調査研究の結果についてのまとめとしてある。

(iv) スターンの『人間成長の場としての大学』(1970)

George G. Stern *People in Context*, 1970, John Wiley and Sons, 402pp

スターンは社会心理学の父と呼ばれたクルト・レビン (Kurt Lewin) から影響を受けた弟子の一人として、当時大学を対象とした社会心理学的な方法で、大学の類型化を大がかりな因子分析による方法で行い、注目を集めていた。1974年までシラキュース大学の教授。*People in Context*は彼の研究成果の著作。それは、米国の約60の大学の学生を対象として集めたデータにより、大学を14のタイプに類型化して、それぞれ学生が大学から受ける影響を学生自身の持っている特性との関係で分析したもの。この*People in Context*は、その発行年1970年の米国高等教育会の出版最高賞を獲得した。

米国における学生を対象として調査・研究の一端を紹介したが、ひるがえって、日本の学生研究のこれまでの現状を見ると、こうした学生の大学教育による影響を調査した研究成果は1960年代の後半にスターンの同僚であったペース (Pace, R) の開発したCUES (College and University Environmental Scales) が日本に紹介された後に日本版CUESが開発されたことにより大学環境に関わる学生研究が始まった。すなわち、立教大学と関西学院大学により日本版CUESにより1970年代に行われた調査が行われたからである。筆者も、日本版CUESを用いて北星学園大学の学生を対象にして1977年と1979年に調査を行った¹⁾。

しかし、それ以後は近年まで長い間この種の調査研究は行われてこなかった。学生研究における彼我の差は大きすぎると言ってよいのではないだろうか。

なぜ、そうなのであろうか。社会科学、人文学などが、実証的な、あるいは客観的なデータを用いての研究をするという文化が育ってこなかったことも一つの原因であろうし、また、そうした実証研究に対しての研究助成の貧弱さもその一因であろう。

しかしながら、近年になり行われてきた山田礼子教授 (同志社大学) を研究代表とする「大学生調査研究プログラム」(JCIRP) や、東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターで行ってきた「全国大学生調査」は、きわめて大規模なものであり、また教育改善に向けての政策に有益である調査・研究とすることが目指されているとのことであるので、これまでの日本における学生研究の蓄積不足を補うことを期待したい²⁾。

6 結論と考察

中央教育審議会の提示した学士力に触発されて大学の教育力とは何かを問い、その結果、学生の人格形成や知的成長に大学の何が影響を与えているかということを仮説的に提起して学士力アンケートを作成して4大学と1大学院の学生を対象に調査を実施した。

その結果、大学の教育力の要因としては、大学教員は最も大きな影響力を与えていることがわかった。しかし、そのみならず、職員にもそうした影響力のあることが示された。そして、何よりも学生の仲間が、即ち学生自身が学生を育てていることが示されたといえよう。また、

大学の行事やプログラムも、そして大学のキャンパスや施設設備も学生に相当程度の影響を与えていることが示された。

4つの大学のそれぞれの要因の教育力には違いがあることも示された。そのことは、それぞれの大学の特色や個性に関わることだともいえよう。また、これからの大学のあり方に関してどの部分を改善していくべきかについての重要な示唆を与えているともいえよう。

本調査は問題の所在を仮説的に示すことが目的であったので、その方法も対象の選択も厳密には行わなかったもので、この結果をもってこの結論を一般化することはできないであろうが、大学の教育の成果を測るということにおいて、一つの問題提起としての意味はあるのではないだろうか。

また、この学士力形成アンケートは質問紙調査としては仮説的に作成したものであり、改良・改善する必要があるだろうが、現在の形のものの利点は、極めて簡潔で短時間に回答をしても行うことができるという実施しやすさにあるといえよう。

ここで筆者は提案したい。それは、多くの大学がこの質問紙により自校についての調査を実施してみてはいかかなものだろうかということである。少なくとも、このアンケートで教員の教育力が示されること、また大学教育の要因としての様々な環境がどう機能しているのかを示していることから、大学の何に力点をおくかを示唆する助けになるであろう。

学生の書いた個々のアンケートの回答を見ると驚くものもある。例えば教員の影響力は0だと書いた回答がいくつかあった。その学生は大学において少なくとも尊敬できる教員には一人も会わなかったのであろう。不幸な大学で学んでいることになる。その逆もあった。教員の影響力が80%もあったという回答である。私淑出来る教員との出会いがあったのであろう。

なお、本調査を進めている中で、いくつかの興味あることを経験したので、そのことについても記しておきたい。その一つは、大学教員は自分の授業や指導助言が学生にどの程度影響を持っていると考えているのであろうかということである。小樽商科大学、函館大学の調査ではゼミ担当の教員に協力して頂いたので、本文中にも一部紹介したが、その時の会話では、自分たちの影響力は極めて小さいものだと言うのが一般的な反応であり、また表現であった。それは謙遜で言われていたのかもしれないが、かなり一般化出来ることではないのかと思われる。そして、このアンケートの回答結果を報告した時に、こんなにも高い数値かという反応に多く出会った。ということは、多くの教員が自分の授業を通じての教育力に必ずしも自信を持っていないということを示唆しており、これは重大な大学教育の問題を暗示しているのではないかと思われた。そして、そのことから示唆されることは、大学教員の教育への自信や確信についての調査が必要だということになるだろうが、それを実施するのは極めて困難な事業だと思われる。

しかし、この調査の結果が大学教員に対しての自分の教育力への自信や確信を促進する助けになるのであれば、それは大学教育にとっての朗報であり、その意味においてもこうした調査を実施する意味はあるのではなかろうか。

わが国の大学では授業評価が一般に行われるようになってきているが、その結果がなかなか

反映されていないということがよく言われる。そこで、授業評価と併せてこのアンケートも実施してみたいかがであろうか。

大学の教育力に関しては多くの事が書かれ、また大学でも教育力を強める努力をしているようであるが、その場合の教育力とは大学の授業を中心とした学生への働きかけとしての取り組みであり、その教育力を学生がどう受け止めているかということについては殆ど証しがないように思われる。

このアンケート調査はそのことに対する問題提起である。教育の受け手である学生の声や意見を大学はもっと聞くことが大学教育の改善・改革につながるのではないだろうか。

さて、最後に繰り返しになるが、本研究は学生がどのように大学から教育的影響を受けているかということについての実証的試行研究である。すなわち、本研究で用いた質問紙は筆者の仮説に基づいた試行的なものであり、その有効性については多くの研究者による検証・批判を得てその質問紙としての有効性を高める必要があるだろう。

また、このような調査・研究の結果が大学のアドミニストレーションやマネジメントにどう関与するのかということについては、大学の第一の目的である教育について、その教育効果を示す一つの証しとして、大学教育のみならず、大学のあり方に関しての改革・改善を示唆する重要なデータを提供するものとして大きな意味があるのではないか、ということを指摘しておきたい。

注

- 1) CUESは1968年に平木典子氏（当時立教大学）により日本に紹介され、その後日本版CUESが1972年に開発され立教大学では1974年、1975年、そして1977年に日本版CUESにより全学生を対象に調査が行われた。また、関西学院大学においても日本版CUESにより1977年から調査が行われた。

筆者も日本版CUESにより北星学園大学の学生を対象に1977年から1979年にかけて3年間の調査を行い、その結果を北星論集に発表した。

しかし、1980年代に入ってからこうした調査は行われなくなった。筆者の場合には学内業務による多忙さが調査研究の時間をとる余裕がなくなったためであった。

- 2) 我が国において従来行われてきた学生を対象とした調査・研究は主として学生の生活実態調査であった。しかし2000年代になり新しいタイプの学生調査が行われ始めた。それは教育成果の評価を測ろうとするもので、広くカレッジインパクト研究 (College Impact on Student) と呼ばれるものであり、本論文の5において紹介した米国における学生研究がモデルとなって行われているものである。

その研究に先鞭をつけ、また代表するものとして山田礼子同志社大学教授を代表とした大学生調査研究プログラム (JCIRP: Japanese Cooperative Institutional Research Program) がある。このプログラムはUCLAの高等教育研究所で用いられてきた研究モデルにより、2004年から始まり2009年に至るまで継続的に行われ、大学生調査だけでなく、新入生調査、短大生調査など、3調査を合わせて310の大学が協力・対象とされ約54000人の学生について調査をしたものである。この調査の特色は情緒的・認知的側面を重視しており、進学理由、生活時間などの過去の実態調査を超えて、自己の経験や能力の評価、価値意識、大学の授業への満足度等、調査項目は広範にわたっていて、その結果は学生の追跡調査や、大学間の比較も可能なことから大学教育の改善・改革に資する資料となると

されている。

また、東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターは2006年から2009年まで全国の大学生を対象とした学士調査を行ってきており、127大学288学部の約48000人に及ぶ学生を対象とした調査結果を2回の調査報告書において公開している。この調査においても、学生の生活実態以上に、授業への評価や、大学の満足度、卒業後の進路など幅広い調査内容となっている。

参考文献

中央教育審議会，2008，『学士課程教育の構築に向けて（答申）』

土橋信男，1979，「大学の教育的環境の継時的研究：1977年から1979年における北星学園大学の教育的環境について」『北星論集』17：115-153.

橋本鉦市（編），2010，『大学生・キャンパスの生態史』玉川大学出版部.

金子元久，2007，『大学の教育力』筑摩書房.

杉谷祐美子，2010，「教育改善に向けての学生調査：継続することの意義」『教育学術新聞』第2416号.

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター，2008，『全国大学生調査：第一次報告書』

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター，2009，『全国大学生調査 追跡調査報告書』

山田礼子，2009，『大学教育を科学する・学生の教育評価の国際比較』東信堂.